

かかみがはら

百科+

Kakamigahara
Encyclopedia

カカミガハラ
スマートミュージアム
Kakamigahara Smart Museum

かかみがはら 2022
百科プラス No. 03

令和4年度企画展

蓑虫山人 各務原を行く

放浪の画人が、この地を訪れたのは

第1章 蓑虫山人の生涯

① 蓑虫山人の生い立ち

蓑虫山人(写真1)は、江戸末期から明治にかけて、日本全国を放浪しながら絵を描き続けた画人です。蓑虫仙人、六十六庵主人とも号しました。本名を土岐源吾といい、天保7年(一八三六)1月3日、美濃国安八郡結村に生まれました。

父は武平司、母は側室で仲とい、二人の姉と一人の弟がいました。家は土岐源氏の流れを汲む名家で、土地では昔から「結村の殿様」と呼ばれて尊敬されていました。しかし、彼が育った頃には、豪農土岐家も家産が傾きはじめ、生活も苦しくなったため、やむを得ず二女二男を相次いで寺に出しています。

彼も7歳のとき東結村の受徳寺(写真2)に、8歳のとき滋賀県の



写真1 蓑虫山人
(ハートピア安八歴史民俗資料館提供)

があります。立証する資料はないのですが、西郷南洲(隆盛)と僧・月照が錦江湾で投身自殺を図ったとき、西郷を海中から救い上げた寺男・重助は自分であったこと、生野の変に参加したことなどを、彼自身が甥の土岐光孝に語っています。

③ 旅絵師 蓑虫山人

蓑虫山人は若い頃から絵筆に親しみ、名所旧跡を訪ねては、その景観を絵によって表現しました。そして、逗留のお礼に絵を描いて渡したり、自分の描いた絵を売ったりして旅を続けました。

伝えられるところによると、蓑虫は20代、すなわち九州漫遊時代に、長崎の僧・鉄翁祖門について絵を学び、一段と進境を示したようです。また、全国各地の神社仏閣や旧家豪農に秘蔵されている名品などを見て歩くうちに、自然に磨かれ独特の作風が生まれました。

蓑虫は、池大雅(江戸中期の南画家に近づくことを理想とし、極端に筆を省略した文人画を描きました。彼は、くちなしの実(黄)・桑の

竹生島の寺に入りました。その後いつ生家に戻ったのかは不明ですが、14歳のとき、思うところあって諸国放浪の旅に出ました。母の死がきっかけであったと言われています。



写真2 受徳寺

② 諸国放浪の旅

生家を飛び出した蓑虫山人の放浪生活は、14歳から61歳まで47年間に及びました。蓑虫は、全国津々浦々を漫遊し、42歳頃には、東北に足を踏み入れました。東北での約20年間の蓑虫の行動は比較的判明していますが、それ以前の足跡は不明な点が多く、はっきり分かっていません。蓑虫自身の口伝によれば、「四国九州より山陰山陽の諸道を歴遊して東海東山に入り、北海の一边までも脚の渉らぬ限もなく」とあり、彼は全

国を隈なく回り、北海道にも渡ったと言明しています。

彼が初めて「蓑虫山人」と号したのは、21歳の頃です。彼の旅は、初めは路傍の軒下に一夜を明かしたり、神社の拝殿に仮寝をしたりするなど、苦勞の限りを尽くしたものだと思われま。あるとき、旅の途中で蓑虫を見た彼は、虫でも家を持っているのに自分はそれよりも劣る生活をしていることを嘆いて発奮し、どこでも野宿できるよう、広げれば2m四方の寝間になり、畳めば1mばかりになる特製の笈を考案します。そして、これに食器や衣服、絵描きの道具などを皆入れて、肩に背負って旅を続けました。これは一種のテントとも言えるべきもので、彼は蓑虫のごとく家を背負って旅を続けたので、自らを蓑虫山人と号するようになります。また、彼の生国が美濃国であったので、それも掛けた呼称であったと言われています。「家を背負って旅する蓑虫」は、彼の漂泊の看板となりました(資料1・2)。

蓑虫は青年時代、「隠れたる勤皇の志士」であったというエピソード

出身の神田孝平(写真3)が訪ねてきたのです。神田と意気投合した蓑虫は、一層遺跡の発掘・古器物の収集に没頭するようになりました。

翌明治20年(一八八七)4月、蓑虫は亀ヶ岡遺跡を発掘し(資料3)、その模様を伝えた手紙を神田に送りました。さらに発掘の様子は神田によって「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ発見津軽の蓑虫翁ノ手束」と題され、『東京人類学会報告』2巻16号に掲載されました。蓑虫のこの報告によって、亀ヶ岡遺跡は中央の学会に注目され、その後の大発掘により、亀ヶ岡が並々ならぬ文化を持った大遺跡であることが知られるようになります。

蓑虫は、考古学の先駆者として評価され、亀ヶ岡遺跡は令和3年(二〇二一)、「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界文化遺産に登録されています(写真4)。



写真3 神田孝平
(タリビアセンター提供)



写真4 現在の亀ヶ岡石器時代遺跡



資料3 亀ヶ岡発掘の様子(個人蔵/青森県立郷土館提供)



資料2 「君待坂観月」 笈を広げて月見を楽しむ蓑虫山人(長母寺蔵)



資料1 蓑虫山人愛用の旅道具「笈と笠と杖」(秋田県立博物館提供)

5 造園家

蓑虫山人は、東北地方では造園業に携わっています。よく知られているのは、明治11年（一八七八）の水沢公園（現・岩手県奥州市）の設計・造園です。これは、当時の水沢町が明治天皇奥羽行幸記念に公園を計画した際、蓑虫山人に依頼したのですが、彼が単なる漂泊者であれば、このような役を任されることはありませんので、その造園技術は並ではなかったと考えられます。

蓑虫は早くから造園技術を持っており、これは関西地方漫遊中に習得したものと言われています。山河を歩き回り、自然景観を画帖に的確に写す間に、大自然を巧みに把握する力が養われ、これが造園設計につながったのでしょう。

6 蓑虫の夢「六十六庵建設」

蓑虫山人は諸国漫遊の旅で、好んで古器物を収集しましたが、単なるコレクターではありませんでした。今日彼が高く評価されるのは、それらを一般の人々に公開していたこと

7 蓑虫山人郷里へ帰る

明治28年（一八九五）、還暦となった蓑虫は帰郷を決意し、漂泊者のシンボルであった箆を自画像とともに秋田県扇田村の徳栄寺に奉納します。そして、翌29年（一八九六）1月、名古屋の異母兄・左金吾の家に帰ってきました。蓑虫は61歳、左金吾とは実に47年ぶりの対面でした。

郷里へ帰ること、それは蓑虫にとって長年にわたる収集品を展示する六十六庵を建設することでした。しかし、郷里は濃尾地震からの復旧のため、それどころではなく、彼は寄付金募集を断念します。次に彼は、六十六庵を熱田神宮の境内に建設する計画を立てますが、それも宮司から断られます。郷里は、彼の宿願を叶える状況にはありませんでした。

放浪生活が染みついた彼は、兄の家にじっとしていることもできず、その後も岐阜、愛知両県下の寺や好事家の家を転々としています。郷里に帰ってもなお、蓑虫は漂泊の人でした。そして「絵日記」は描き続けられ、古器物には相変わらず関心を寄

せ、土器などの拓本を取ったりしています。その間には岐阜県長良の志段見山中で、全て竹で編んだ籠庵（資料5）なるものの中で暮らすという奇行を演じています。

蓑虫は、明治32年（一八九九）春、次姉の恵鏡尼がいる尾張国丹羽郡北小沢村（現・一宮市）の大慈寺に赴き、同年10月には、長姉・祖俊尼が住職を務める寿松院の本寺である名古屋の長母寺へ移ります。彼は最後まで六十六庵建設の夢を諦めることなく、最後の建設地を同寺の境内にしようと心に決めますが、半年後の明治33年（一九〇〇）2月20日、近所の漸東寺へもうい湯に行って倒れ、亡くなりました。享年65歳でした（写真5）。



写真5 蓑虫山人の墓（長母寺）



資料5 籠庵を志段見に運ぶ途中、岐阜市笹土居町の長崎屋総本舗前で休憩する蓑虫山人（長母寺蔵）

蓑虫山人関係年表

天保7年(1836)	1歳	正月3日、美濃国安八郡結村に生まれる
天保13年(1842)	7歳	東結村受徳寺の仏弟子となる
天保14年(1843)	8歳	竹生島の寺に仏弟子として行ったと伝えられる
嘉永2年(1849)	14歳	生母・仲没。放浪の旅に出る
嘉永5年(1852)	17歳	生家の父・武平司、一家で名古屋に移る
安政2年(1855)	20歳	この頃、西国九州放浪か？
安政3年(1856)	21歳	蓑虫山人と号する
安政5年(1858)	23歳	西郷隆盛と僧・月照が錦江湾で投身自殺を図る
万延元年(1860)	25歳	画を鉄翁祖門に学ぶか？
文久3年(1863)	28歳	生野の変に関係か？
明治5年(1872)	37歳	岐阜博覧会古器物取調係になる
明治10年(1877)	42歳	東北地方に足を踏み入れる
明治11年(1878)	43歳	岩手県水沢町に至り、水沢公園を造る
明治19年(1886)	51歳	神田孝平に逢う
明治20年(1887)	52歳	亀ヶ岡遺跡発掘の状況を神田孝平に報告
明治24年(1891)	56歳	10月 故郷の美濃で濃尾地震発生
明治26年(1893)	58歳	郷里に六十六庵建設を発念、建設資金を募る 濃尾地震の様子を安八郡結村に問い合わせる
明治28年(1895)	60歳	9月 帰郷決意、愛用の箆を扇田村徳栄寺に納める
明治29年(1896)	61歳	1月 異母兄・左金吾宅に滞在 4月 岐阜県羽島郡下羽栗村円城寺の樋口健次郎、武山栄三郎宅に滞在 6月 秋田県徳栄寺住職に箆の返還を求める 初秋 蓑虫撰「無言之記」成る
明治30年(1897)	62歳	4月 網掛茶屋、弘誓寺、葛原村を漫遊 5月 養老山中に籠る 8月 本巣郡を漫遊 10月 籠庵製作 11月 籠庵を志段見山中に運ぶ
明治31年(1898)	63歳	4月 志段見を去る 8月 長良川納涼 10月 「皇太子殿下岐阜市歓迎の図」を描く
明治32年(1899)	64歳	7月 大慈寺（次姉の寺）聴衆に国体の趣旨を説く 10月 長母寺に移る。多年収集の古器物、出土品を運ぶ
明治33年(1900)	65歳	2月20日没。法名「蓑虫庵遍照源吾居士」

第2章 蓑虫山人が描いた各務原

明治29年（一八九六）1月に東北地方における長年の旅を終え、郷里に戻った蓑虫山人は、その後4年間（明治29～32年）、美濃・尾張の名所旧跡や旧家、古器物の所有者を訪ねて歩き、それらを精力的に絵に描いて残しました。同時期に蓑虫は各務原を訪れ、人々との交流を深めています。

蓑虫が描いた各務原市域の絵日記は、現在15枚残っています。訪れた時期については不明なものが多いのですが、明治30年4月に、各務郡が厚見郡と方県郡の一部と合併して稲葉郡となっていることから、絵日記に「各務郡」と書かれているものは明治29年頃、「稲葉郡」と書かれているものは明治30、31年頃の作品であると推測されます。蓑虫の作品には、「各務郡」と「稲葉郡」と書かれたものが両方存在するので、彼が複数回にわたって各務原を訪れていたことが分かります。

那加村 手力雄神社



資料6 各務郡那加村郷社手力雄神社之図(長母寺蔵)

手力雄神社と石山付近の風景を描いた絵日記。明治29年頃。

蓑虫が描いた手力雄神社から石山にかけては、山日向古墳群の場所と一致し、かつて16基の古墳が確認されていた。写真がまだそれほど普及していなかったこの時代、絵日記には、手力雄神社から石山にかけて10数基の古墳が描かれており、当時そこに古墳があったことを確かに示す貴重な歴史資料ともなっている。現在はほとんどが消滅し、4基が現存するのみとなったが、そのうち手力雄神社境内西古墳（1号墳）（写真6）と手力雄神社境内東古墳（2号墳）は市指定史跡となっている。

那加尋常小学校（現・那加第一小学校）は、明治30年（1897）4月に石山の西半分と南麓を削って建設されているが、その際に多くの古墳が失われ、勾玉や土器が出土した。このような経緯から、勾玉は那加尋常小学校の校章（写真7）に描かれ、那加村のシンボルとなった。勾玉がデザインされた校章は、現在も那加地区の4小学校、2中学校で使用されている。

また、手力雄神社には、本殿、拝殿とともに、当時あった舞台が描かれている。

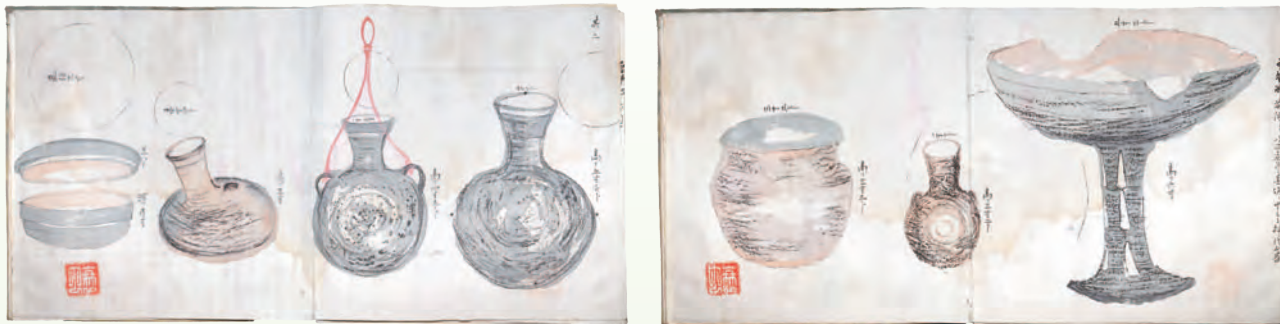


写真6 手力雄神社境内西古墳



写真7 那加第一小学校校章

那加村 前洞



資料8 各務郡前洞より明治29年春掘り出づる神代土器 其の二(長母寺蔵) 資料7 各務郡前洞より明治29年春掘り出づる神代土器 其の一(長母寺蔵)

土器7点が丁寧にスケッチされ、寸法も記述されている。この絵日記から、蓑虫が明治29年春には各務原を訪れていたことが分かる。当時、前洞に存在した古墳（巾下古墳群・南洞古墳群）から出土した須恵器を、蓑虫がスケッチしたものと推測される。この頃、蓑虫が前洞の松岡清重郎（後の那加村長）と交流した記録が残っている。

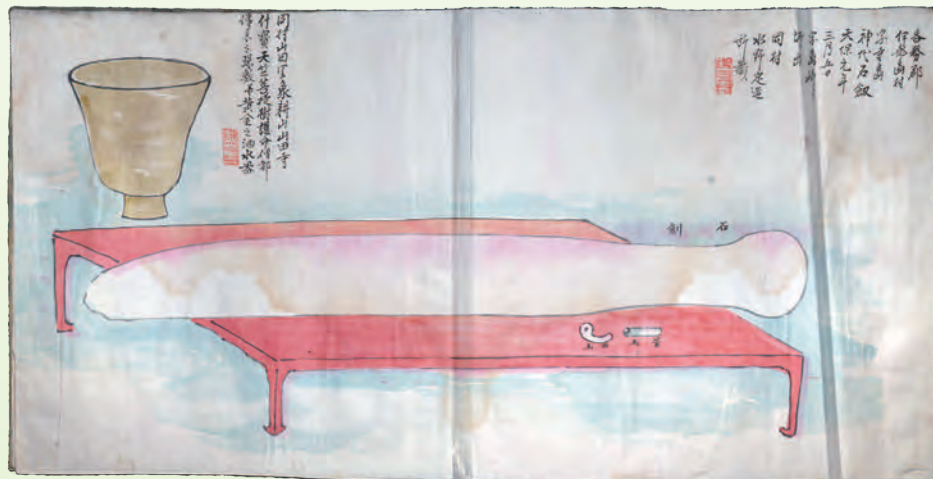
蘇原伊飛鳥村 水野定藏邸



写真8 舍利容器



写真9 石刀



資料9 各務郡伊飛鳥村字寺島神代石剣(長母寺蔵)

石剣（正しくは石刀）と勾玉、管玉、黄金の酒水器が描かれた絵日記。明治29年頃。「石剣は、天保元年（1830）3月5日、各務郡伊飛鳥村字島崎より掘り出されたもので、同村字寺島の水野定藏が所蔵している。また、護命僧都伝来の珠数と黄金の酒水器は、同村山田里、象耕山山田寺の寺宝として秘蔵する器物である。」と説明されている。黄金の酒水器は、蓋は描かれておらず形も少し違うようであるが、国指定重要文化財の舍利容器（美濃国稲葉郡山田寺塔心礎納置銅壺）（写真8）であると言われている。

水野家に伝えられている話では、蓑虫はどこからか定藏が石刀を所持していることを聞きつけ、それを見に訪れたということである。水野家を訪れた時の蓑虫の姿は異様で、まさに奇人だと感じたそうである。蓑虫は、水野家に数日間逗留し、お礼に絵を残した。蓑虫は子どもたちにも絵を描いて渡し、子どもたちは絵を竹に吊るして走り回って遊んだという。

石刀（写真9）は飛鳥田神社のご神体であるとされ、水野家では祠を作って祀っていたが、その後、水野家から各務原市教育委員会に寄贈され、現在は市埋蔵文化財調査センターで保管されている。



水野定藏（生年不詳～一九二二）
水野定藏は、郡会議員や加佐美神社の氏子総代も務めた地元の名士で、古器物の収集家でもあった。水野家には、今も付近の畑等から出土した考古品が保管されている。

蘇原古市場村 仲野亦市邸



資料13 郷社加佐美神社古祭礼車輪の由緒書(長母寺蔵)



資料12 郷社加佐美神社宝品古祭礼車輪(長母寺蔵)



資料14 稲葉郡蘓原村大字古市場発掘品の数々(長母寺蔵)



仲野亦市(一八五三〜一九三三)
仲野亦市は、古市場村戸長(明治13年)、蘇原村五代目村長(明治33年12月〜明治37年8月)、蘇原郵便局初代局長を務めた。亦市は古器物の収集家としても知られており、『蘇原村郷土史』には「古市場外山ノ南麓ニモ古墳多数現存シ発掘セラレシ土器等仲野氏方ニ保存セラル」と記述されている。

蓑虫が仲野亦市邸を訪れた時期については不明であるが、「郷社加佐美神社宝品古祭礼車輪」(資料12)、「郷社加佐美神社古祭礼車輪の由緒書」(資料13)では各務郡と書かれていることから明治29年頃、また、「稲葉郡蘓原村大字古市場発掘品の数々」(資料14)(注:本展示解説における「蘇」「蘓」の表記は、原則として原資料に従った。以下同。)では稲葉郡と書かれていることから明治30、31年頃であると推測される。このことから、蓑虫は明治29年から31年にかけて複数回、仲野亦市邸を訪れていることが分かる。

「郷社加佐美神社宝品古祭礼車輪」には、寸法入りで古祭礼車輪がスケッチされており、その「由緒書」には、「加佐美神社は美濃国各務郡蘓原郷古市場村にある。昔、例祭のとき、車上の児童歌舞において、村人が運転した車にこの輪を用いた。その歌舞、即ち蘓原演劇の起源である。我が家の子孫はその宝をここに護っている。」と書かれている。

「稲葉郡蘓原村大字古市場発掘品の数々」には、亦市が所持する外山や加佐美山から発掘された土器や石器、勾玉が描かれている。

那加村西市場 山田與十郎邸



資料10 各務郡那加村山田與十郎所有神代土器(長母寺蔵)

與十郎が所有する石器や土器を蓑虫山人が描いたもの。明治29年頃。

山田與十郎(一八四三〜一九一九)
山田與十郎は、明治以降の各務原開墾において、陸稻や甘藷の栽培、養蚕等の指導で地域農業の進歩に大きく貢献した人物で、篤農家として知られる。與十郎はまた、県立各務野牧場(現・那加信長町付近)の経営に当たり、朝早くから夜遅くまで原野を開拓し、牧畜の改良増殖に尽力した。岐阜県農業の発展に尽くした與十郎は、大正8年(一九一九)8月22日にその一生を閉じたが、一年後の大正9年(一九二〇)8月には、県立各務野牧場があった場所に、那加村西市場の有志により顕彰碑が建立された。しかし、近年になって撤去され、現在は残っていない。



那加村西市場 西澤徳藏邸

土器が2点スケッチされており、「明治31年8月に土山麓(現・琴が丘団地)から掘り出した土器を、同年10月蓑虫山人の求めに応じて呈した。」と賛が書かれている。蓑虫山人は、古器物の収集家であった西澤徳藏を訪ね、土山から出土した土器をスケッチし、さらに譲ってくれるように求めたのであろう。現在は住宅地となった土山には、かつて土山古墳群があり、山麓、および南側の平地に17基の古墳が確認されていた。しかし、現在は全て消滅している。



資料11 稲葉郡那加村土山麓にて発掘の土器(明治31年8月)(長母寺蔵)

那加村山後 遠藤彦次郎邸



遠藤彦次郎（一八五九～一九一八）
遠藤彦次郎は、那加山後の旧家の出身で、大正3年（一九一四）12月から大正5年（一九一六）9月まで那加村の村長を務めている。



遠藤家に残る井戸



資料18 美濃国稲葉郡那加村山後遠藤彦次郎家宅之図（長母寺蔵）

明治31年頃。絵には、彦次郎邸のほか、金華山や夕暮富士、土山、舟伏山、境川、正蔵寺等が描かれている。絵に描かれた庭の井戸は、現在も遠藤家に残っている。

蘇原村古市場 光泉寺



資料19 岐阜県稲葉郡蘇原村大字古市場相生山光泉寺境内林泉庭之図（長母寺蔵）

明治30、31年頃。絵を見ると、木々の葉が赤く染まっており、秋に訪れたようである。

川島村 木曽川

川島の木曽川の様子を描いたもの。蓑虫山人が、村人と船に乗って桃の花見を楽しんでいる。古老の話によれば、昔川島には多くの桃の木があったということである。明治32年度の岐阜県内の桃の樹数は、羽島郡が11,030本と他の郡市と比べて圧倒的に多く、その中でも川島は、羽島郡内の主な産地であると記録されている（明治32年度岐阜県統計書）。



資料20 吉籬川島桃花之図（長母寺蔵）

那加村山後 遠藤儀作邸



遠藤儀作（一八六〇～一九三二）
遠藤郊北は雅号で、本名は遠藤儀作。儀作は那加山後の名家に生まれ、小学校の教員を務めた後、明治36年（一九〇三）、各務原市域で初の県議会議員に選出された。その後、大正6年（一九一七）に第10代・那加村村長となり、昭和7年（一九三二）まで4期15年余在任し、今日の各務原発展の礎を築いた。



顕彰碑
（那加山後町）



胸像
（各務原市民公園）

岐阜高等農林学校の誘致等、那加村の発展に尽力した功績を讃えて、昭和63年に建立された。



資料15 稲葉郡那加之郷遠藤郊北居宅之図（明治31年仲秋）（長母寺蔵）



資料16 郊北一族と養虫の宴と郊北の賛（明治31年仲秋）（長母寺蔵）



資料17 郊北邸築園を養虫説明の図（明治31年仲秋）（長母寺蔵）

蓑虫山人が遠藤儀作邸を訪れたのは、明治31年（1898）仲秋（9月下旬～10月上旬頃）で、儀作39歳のときである。

儀作が書いた賛には、「仙翁は、鬚も髪も真っ白で、噂と一つも違わず、俗人を超越した一世の奇人であった。仙翁は数日間我が家に滞在したが、彼が得意とする山水画は、見たままそっくりで、本物と見紛うほどであった。また、仙翁は築園を嗜んでおり、いろいろなところで庭園を造っているが、その雅さは風水画のようであった。」とあり、全国を放浪して、ついに山水に妙を得た蓑虫が、それを絵や庭造りに生かして素晴らしい作品を生み出していることを讃えている。

第3章 蓑虫山人が残したもの

各務原を訪れた蓑虫山人は、逗留のお礼に各家に絵を残しています。現在、各務原市内で確認されている蓑虫の絵は、襖絵^{ふすま}2組、屏風絵3帖、額装2点、掛け軸10幅です。

水野定藏家に残る作品

絵日記にも描かれた水野定藏家の子孫の家には、蓑虫山人が描いた屏風絵1帖と掛け軸1幅が残っている。
 屏風絵(資料21)は6曲1帖で、それぞれの絵には、「土岐蓑虫」「六十六庵主蓑虫」「蓑虫山人」と、蓑虫が用いてきたいくつかの雅号が書かれている。
 掛け軸(資料22)は1幅で、「富士と鶴」が描かれている。



資料21 水野定藏家に残る屏風絵(水野晏嘉氏蔵)



山水之図



山水と舟之図



煎茶器と花瓶之図



資料22 富士と鶴(水野晏嘉氏蔵)



鶏之図



月見山水之図



蓑虫談笑之図

遠藤彦次郎家に残る作品

絵日記にも描かれた遠藤彦次郎の子孫の家には、蓑虫山人が描いた掛け軸3幅(資料23~25)と額装1点(資料26)が残っている。

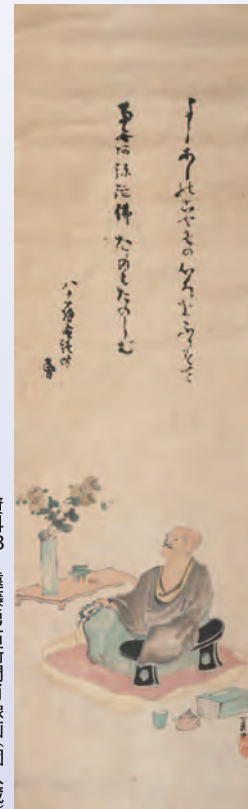
掛け軸には、彦次郎の父にあたる遠藤勇右衛門の肖像(資料23)や蓑虫がこよなく愛した養老瀑布(資料25)などが描かれている。



資料25 養老瀑布(個人蔵)



資料24 大僧正(個人蔵)



資料23 遠藤勇右衛門肖像画(個人蔵)



資料26 富士山(個人蔵)

坪内昌壽家に残る作品

旗本前渡坪内家最後の当主であった坪内昌壽の子孫の家には、掛け軸1幅(資料27)が残っている。訪れた年代は不明だが、他の各務原市域の場所と同じように、明治29年から31年頃と推測される。

一般的に鍾馗^{しょうき}之図像は必ず長い鬚を蓄え、中国の官人の衣装を着て剣を持ち、大きな眼で何かを睨みつけている姿が多いが、蓑虫が描いた鍾馗は優しくユーモラスで、蓑虫らしい作風となっている。



資料27 鍾馗之図(坪内健治氏蔵)



資料35 七福神(個人蔵)



資料36 達磨之図(個人蔵)



資料37 鶴之図(個人蔵)



国幣南宮之図



資料34 天橋立・山水月見之図(個人蔵)



養老瀑布之図



資料33 養老瀑布・国幣南宮之図(個人蔵)



山水月見之図



天橋立之図

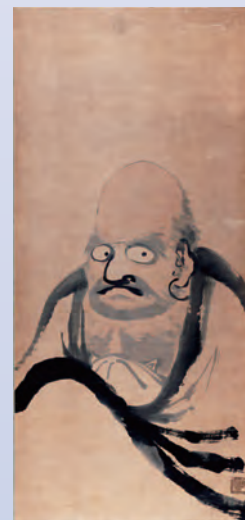
北島(前渡東町)に残る作品

養虫山人は北島を訪れているが、地域の様子を描いた絵は残っていない。訪れた年代は不明であるが、明治29年から31年頃と推測される。当時の河北山桃林寺は、今より木曾川沿いにあり、現在地に移転したのは昭和3年(1928)のことである。当時は無住の寺で、他の寺の住職が交代で住職を務めていた。この無住の寺に、養虫山人がしばらくの間逗留していたという。桃林寺には、襖絵(資料28・29)、掛け軸(資料30・31)、額装(資料32)が残っている。「万里春風之図」には、「三府七十二県庵主人」と雅号が書かれている。

また、養虫山人は逗留中、近くの農家から食料等の援助を受けており、養虫が逗留のお礼にと描いた屏風絵(資料33・34)、掛け軸(資料35～37)が、現在も北島の民家に残っている。



資料28 豊干寒山拾得之図(桃林寺蔵)



資料31 達磨之図(桃林寺蔵)



資料30 滝見観音像之図(桃林寺蔵)



資料29 梅木之図(桃林寺蔵)



資料32 万里春風之図(桃林寺蔵)

放浪の画人が、各務原を訪れたのは

蓑虫山人が東北から故郷に帰り、美濃と尾張を漫遊したのは、明治29年から32年にかけてのことです。この間、蓑虫は現在の各務原も訪れていますが、絵日記の数は他の地域より比較的多く、訪問回数も複数にわたることが分かっています。それではなぜ、蓑虫山人は各務原を何度も訪れたのでしょうか。

蓑虫山人の夢は、故郷に「六十六庵」という博物館を建設し、自分が収集した古器物を展示することでした(写真10)。濃尾地震等の影響で、六十六庵の建設は困難な状況にありましたが、それでも彼は死の直前まで自分の夢を諦めることはありませんでした。

蓑虫山人が各務原を描いた15枚の絵日記のうち、約半数の8枚が古器物のスケッチやその由緒書です。これは、他の美濃地域の絵日記と比べると大変多いことが分かります。各務原は、岐阜県内でも古墳が多いことで知られ、蓑虫が各務原を訪れた明治期には600以上の古墳が存在していました。そのため、仲野亦市、西澤徳藏、山田與十郎、水野定藏ら古器物の収集家も何人かいました。

た。蓑虫は、彼らのような収集家を訪ね、古器物をスケッチしたり、譲ってもらったりしました。

水野定藏家では、「蓑虫山人は石刀を見るという目的で我が家にやってきた」と伝えられているように、蓑虫は漠然と各務原を訪れたのではなく、古器物を見、スケッチし、収集しようという明確な目的を持って訪れたのではないかと推察します。古墳や遺跡が多く、古器物の収集家が多かった各務原は、蓑虫山人にとって、とても魅力ある地域でした。だからこそ蓑虫は、複数回にわたって各務原を訪れたのでしょう。

各務原の収集家たちと、笑顔で六十六庵建設の夢を語る蓑虫山人の姿が、目に浮かんでくるようです。

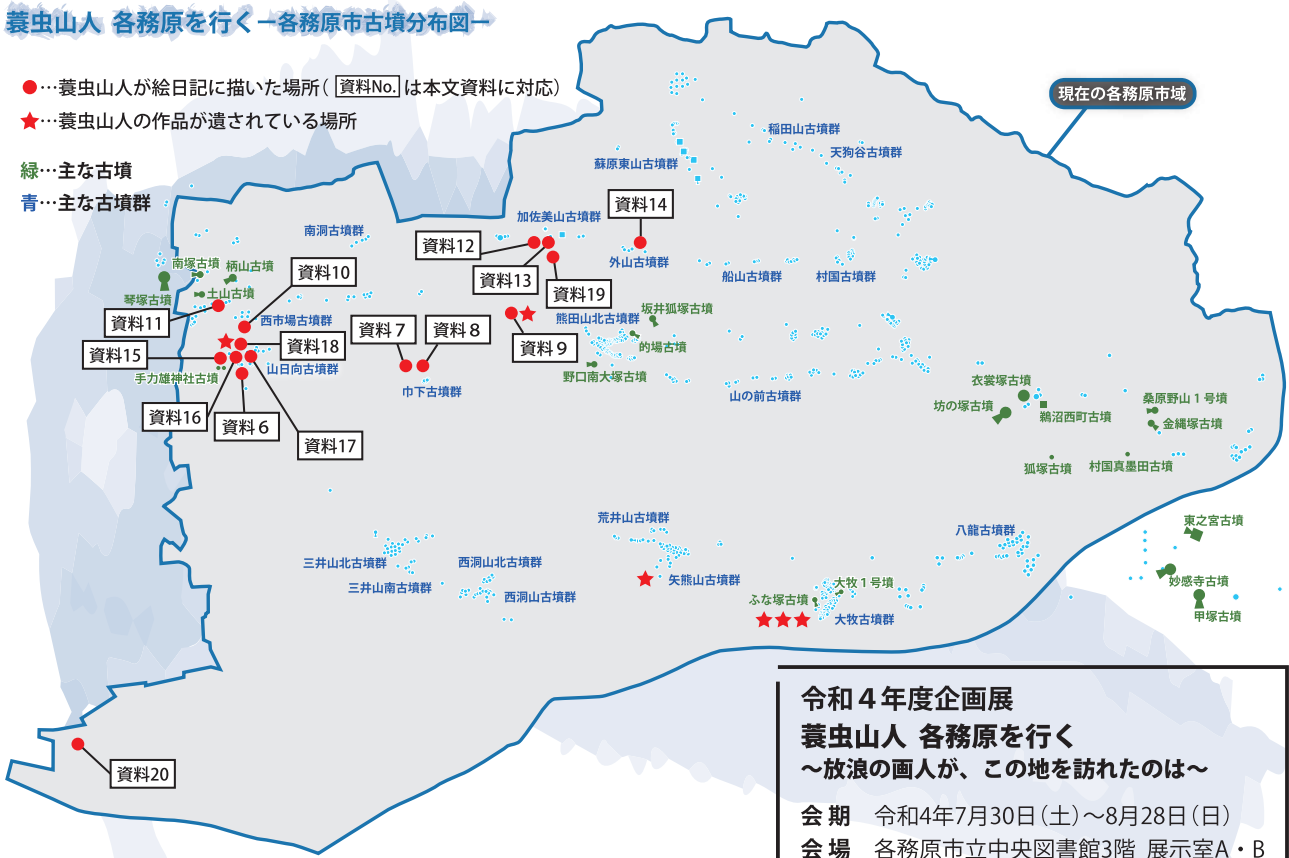


写真10 蓑虫が収集した古器物(長母寺蔵)

蓑虫山人 各務原を行くー各務原市古墳分布図ー

- …蓑虫山人が絵日記に描いた場所(資料No.は本文資料に対応)
- ★…蓑虫山人の作品が遺されている場所

緑…主な古墳
青…主な古墳群



令和4年度企画展
蓑虫山人 各務原を行く
 ～放浪の画人が、この地を訪れたのは～
 会期 令和4年7月30日(土)～8月28日(日)
 会場 各務原市立中央図書館3階 展示室A・B
 主催 各務原市教育委員会